

留置場は「まるで介護施設だ」

老人の万引事件が過去最多を更新中だ。警察の留置場は年寄りたちであふれ、「まるで介護施設だ」という嘆き節も聞かえる。ある日、警察から「お宅のお父さまを預かっています」なんて連絡が来た。

4月下旬、都内の製菓会社に勤務するAさん(引)の携帯に電話が入った。内容は、80代の父の万引。自分も何卒、別々に度も買い物した地元のスーパーで「要用せつけん」(290円)を窃盗した疑いだった。Aさんは職場に「父が急病で」とワソをつき、1時間かけて警察署に向かった。

老親が

万引したら

すべきりんと

警視庁の分析では、高齢者の万引急増の理由は、「貧困」や「孤独」に原因があるといふ。万引犯へのアンケートでは、約42%の人に資産がなく、19%は生活保護者だったのだ。

だが、全国介護者支援協議会会長の上原晋光氏はこう言う。「万引は、クセです。ごくま

「現役の頃は信用金庫に勤務し、謙虚実直で尊敬できる父でした。初犯ということで、警察も厳重注意で帰そうとしたそうだが、父が「せつけんがカバンに入っていた。へなせ入ったかは分からない」と言い張ったので、身元引受人が必要になりました。しかし、実家の母は呼ばれ



しきからか、それとも(妻に心配をかけまい)という優しさだったのか……」

昨年、万引で検挙された高齢者(65歳以上)は2万7362人、統計のある86年以降、最多だった。20年前に比べると、確かに高齢者人口は約2倍に増えているが、検挙数は7・6倍、10万人当たり犯率は3・9倍という異帯さだ。笑うに笑えない事態にもな

ない、こればの話だが……。も高齢者の万引を助長する。しかし、犯罪は犯罪。年寄いた親を犯罪に走らせたくはない。

愛知県警の調査では、万引犯を警察に「全件」届けの店舗は、わずか48%。被害届を出さず、「1事件処理に2、3時間かかる」と、そもそも家族経営の店舗は、店番がいなくなる。さすがに警察沙汰になれば、親も迷惑すると思うのだが、どうも世の中はうまくいかないのだ。

一般例だが、万引は、1〜2回目是不起訴、3〜4回目は罰金刑、5回目で裁判になる。執行猶予判決という流れ。もちろん、店が届け出れば、心を育てることも必要だ。

っている。留置場が年寄りで満杯。なのだ。「困ったことに、高齢者には体の不自由な人が多い」ところが、警察署は予備の都合上、最もバリアフリー化が進んでいる公的施設のひとつ。トイレに行くにも、階段を上るにも、警官2人の介助が必要で、そのたびに人員を動かしてるんです」(警察関係者。まるで介護施設というわけ

「高齢者の万引は、地元の小規模スーパーで行うことが多いわ。そして、スーパーはいわば老人たちの憩いの散歩コースです。特に目的もないのに行くので、逆について付いた伍話のカバンに入れてしまったのです。へカバンを持つと、魔が差す人もいます。食卓の話題にすれば、それで気が付く親もいます」(上原晋光氏)。叱るは愚策、むしろ、遠く離れているなら、頻繁に連絡をする。そんな子どもには「恥ずかしい」思いはさせられない」となるだろう。「親心」を育てることも必要だ。